

第22回白壁賞は清水誠治氏らが、 第41回村上記念「胃と腸」賞は江崎幹宏氏が受賞

残暑厳しい中にもようやく秋の風を感じ始めた2016年9月21日(水)、東京の笹川記念会館で開かれた早期胃癌研究会の席上にて、第22回白壁賞と第41回村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。第22回白壁賞は清水誠治・他「診断困難な炎症性腸疾患の特徴」(「胃と腸」50:867-876, 2015)に、第41回村上記念「胃と腸」賞は江崎幹宏・他「血管炎による消化管病変の臨床診断—IgA血管炎(Henoch-Schönlein紫斑病)」(「胃と腸」50:1363-1371, 2015)に贈られた。

授賞式の冒頭、今回のプレゼンターである選考委員の斉藤裕輔氏(市立旭川病院消化器センター)から、両賞の選考過程の説明が行われた。今回の選考では、“白壁賞は173編プラス英語論文1編の174編から、村上記念「胃と腸」賞は173編から選出しました。お二人の先生、誠にありがとうございます”と両名の受賞を祝した。

第22回白壁賞

白壁賞の受賞者代表として清水誠治氏(大阪鉄道病院消化器内科)が紹介された。続いて、「胃と腸」編集委員長の鶴田修氏(久留米大学医学部内科学講座消化器内科部門)欠席のため、斉藤氏から祝辞とともに、賞状と楯が贈呈された。

白壁賞は、故白壁彦夫氏の業績を讃え、“消化管の形態・診断学の進歩と普及に寄与した論文”に贈られ、「胃と腸」に掲載された論文に加え、応募論文も選考対象となる。今回の受賞論文は、診断困難な炎症性腸疾患(inflammatory bowel disease; IBD)の特徴を挙げ、その診断例を類型化したもの。診断困難例としては疾患概念が未確立の疾患、既知の疾患の初期病変や非典型病変、病原体の証明が困難な感染症、複数の疾患の合併病変、想起することが困難な希少疾患が挙げられる。また途中で当初の診断が変更されたものや、ある疾患の疑診にとどまっている場合も診断困難例に含まれる。IBDの診断は、診断者の力量に大きく依存するケースもある一方で、診断困難な原因が病変自体にあるケースも多く、さまざまな診断困難例のパターンを認識し、病変の分布や形態から可能な限り既知の疾患に当てはめていくことが重要である。既知の疾患概念から外れるものは特徴的な病像を抽出し、新たな疾患として類型を構築する必要があるとしている。

受賞者挨拶で清水氏は、“この度は栄えある白壁賞をいただき、大変光栄に存じます。早期胃癌研究会に私が最初に訪れたのが30年前で、その当時、白壁先生が熱く診断学を語っ



▲ 両氏には斉藤氏から賞状と楯が贈られた

ておられたその現場を目の当たりにしております。白壁賞はかなり歴史を経ている賞ですが、私にとっては高嶺の花であり縁がないと決め込んでいましたので、今回の受賞で最も驚いているのはこの私自身ではないかと思っています。とは言いますが、この受賞論文の執筆にあたりましては、今までで最も苦心惨憺して途方に暮れたというのが正直なところで、4か月間、構想を練りつつ原稿を執筆しました。私にとっては非常に思い出深い論文であります。「胃と腸」編集委員会の先生方、会場の皆さま、「胃と腸」の読者の皆さまに、この場をお借りして御礼申し上げます。それとともに、私が右も左もわからない頃から指導していただきました多田正大先生、故・川井啓市先生に敬意を表したいと思います”と述べた。

第41回村上記念「胃と腸」賞

続いて、村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。受賞者代表として江崎幹宏氏(九州大学大学院医学研究院病態機能内科学)が紹介された後、斉藤氏から賞状と楯が贈られた。

村上記念「胃と腸」賞は、故村上忠重氏の業績を讃え、“消化器、特に消化管疾患の病態解明に寄与した論文”に贈られ



▲ 第22回白壁賞を受賞した清水誠治氏



▲ 第41回村上記念「胃と腸」賞を受賞した江崎幹宏氏

る賞で、「胃と腸」50巻に掲載された全論文が選考対象となった。今回の受賞論文は、腹部症状を呈したIgA血管炎(旧病名:Henoch-Schönlein紫斑病)15例の臨床像と罹患部位を検討したもの。IgA血管炎は、小腸と十二指腸に病変が高率に出現するが、両者では臨床経過や重症度が異なる場合があることを示し、十二指腸だけでなく小腸病変の内視鏡評価も欠かせないと考えられると結論付けた。検討の詳細として、15例中3例(20%)で腹部症状が紫斑出現に先行しており、罹患部位は十二指腸が13例(87%)、小腸が14例(93%)と高率であった。また、IgA血管炎8例の十二指腸・小腸の内視鏡所見を比較すると、十二指腸下行脚にびらん・潰瘍を認めた5例では小腸にもびらん・潰瘍が確認されたが、3例では十二指腸と小腸で潰瘍周囲の発赤・浮腫の様相が異なり、病変形成における時相の差異が推測された。

受賞の挨拶として、江崎氏は、“この度は私どもの論文に「胃と腸」賞という大変栄誉ある賞を授けていただき、誠にありが

とうございます。「胃と腸」編集委員の諸先生方ならびに医学書院、関係者各位にこの場をお借りして深謝申し上げます。私が所属しています九州大学病態機能内科学消化器研究室は、初代の岡部治弥先生を筆頭に八尾恒良先生、飯田三雄先生、松本主之先生と、画像診断のみならず臨床研究にも大変厳しい目を持った先生方が代々主任を務めてこられました。私はその研究室に入り23年が経過していますが、栄誉ある本賞をいただくことができましたのは、このような先生方、およびこれまで消化器研究室を支えてこられました諸先輩方の教への賜物であると思っています。これからさらに精進して消化器研究室の名を汚さぬように、そして「胃と腸」を通じて消化管診断学に少しでも貢献できるように努力してまいります”と述べ、挨拶を終えた。

最後に、両賞の受賞者に改めて満員の会場から賞賛の拍手が送られ、授賞式は終了した。